

第二十七號

中山道鐵道線路西起工之儀鐵道局長
井上勝ヨリ意見具狀ニ付伺

中山道鐵道幹線ノ工事ヲ東西二部ニ分テ其東
部ハ碓氷嶺ノ困難アルヲ以テ建築資用ノ材料
搬運ノ便利且將來ノ得失ヲ慮リ上田直江津
間線路布設起工ノ儀客歲十月第百拾號ヲ以
及上請置候處今復々其西部ニ係ル線路撰定
ノ儀別紙ノ通鐵道局長井上勝ヨリ意見書提
出候ニ付篤ト査閱候ニ工事ノ難易運輸ノ便否
ヲ詳論シ其云フ所一々當ヲ得タルモノト被存候
ニ付右意見ノ通名古屋半田間線路布設ノ儀
速ニ御裁決相成度仍テ意見書相添此段相伺
甲三〇

候也

明治十八年三月廿日

工部卿伯爵佐々木高行

太政大臣伯爵三條實美殿

伺ノ趣四日市線ノ儀ハ最前指令ノ通相
心得名古屋羊田線ノ儀ハ建築資材運
搬ノ為ノ便ニ布設ヲ改事

明治十八年六月二十日

客年十月中仙道鐵道幹線ノ工事ハ之ヲ東西ノ
二部ニ分チ兩端ヨリ相進シテ中央ニ相會スルノ
計畫ニ從フヘキモノトシ其東部ノ工事ハ碓氷
嶺ノ山脉ヲ踰ルノ困難アルヲ以テ鐵道建築資
用ノ材料搬運ノ便利ヲ謀リ且將來營業上
ノ得失ヲ慮リ上田直江津間線路布設起工ノ
採可ヲ仰キタリ今ヤ其西部ノ工事ニ関シ大
體ノ計畫ヲ具シ閣下ノ高裁ヲ仰カントス
抑幹線ノ西部ハ目下已ニ工事経営中ナル大垣
ヨリ岐阜ニ至ルモノヲ延長シ名古屋ヲ經由シ
以テ木曾路ニ連絡スルノ線ヲ執ラサルヘカラス
蓋シ名古屋ハ尾濃參遠數州ノ豊富ヲ承ケ人

烟稠密物産饒多地位已ニ三府ニ亞ク幹線ノ
此ニ經由スヘキハ固ヨリ當然ノ事ニシテ敢テ
喋々ヲ要セス方一幹線此ニ經由セサルモノト決
スルモ必ス枝線ヲ布設シ天賦ノ利ヲ曠スル
コト莫ルヘシ

西部幹線ノ方向名古屋ヲ經由スルモノトシ其
施工ノ順序ヲ立ルニ最キニ己ニ詳説セシ如ク先
其資用材料運搬ノ便如何ヲ講セサル可ラス
而シテ其材料ハ主トシテ鉄條其他海船ヨリ
移搬スルヲ要スルノ物品ナルヲ以テ之ヲ神戸
港ヨリ大津ニ輸送シ琵琶湖ノ船便ニ移シ再
ヒ長濱ヨリ大垣ヲ經テ轉輸スルトキハ頗ル
迂回ヲ極メ工事ノ力爲メニ艱難ヲ感スル實

ニ小細ナラス依テ幹線ヲ便宜ノ海岸ニ延布シ
此艱難ヲ排除セサル可ラス是勝カ垂井四日市
間民設鉄道布設ヲ企圖スルモノアルニ當リ之
ヲ幹線部内ノ一區ニ編入シ以テ官設トナスヘキ
ヲ上申シタル主旨ナリ

然ルニ爾後垂井四日市間線路實測ニ着手セ
シノタルニ同線ハ地形甚鉄道布設ニ適セス工
事頗ル困難ナルヘキノ徵候アリテ大ニ豫想ニ
及セリ茲ニ於テ左顧右眄幹線資材運搬ノ
便ヲ考按シ聊カ望ヲ尾ノ半田港ニ繫ル所ア
リ此港ヤ名古屋ノ南凡十里餘智多郡半島ノ
東側ニ位シ道途峻ナラス灣形ハ船舶ノ碇繫
ニ便ナルカ如シ然レトモ其果シテ埠頭ノ用ニ

適スヘキヤ否ヲ知ラス依テ請テ海軍省ニ商
議シ始メニ其概測ヲナシ後竟ニ精密ナル測
量ヲ了リ其報告書ヲ得タリ此報告書ニ據
ルニ智多湾口ハ二道ノ安全ナル航路アリテ曾
テ岩礁ノ通船ヲ妨礙スヘキ懼レアリト云タル
モノハ所謂疑心ヨリ生セシ暗鬼ニシテ普通ノ
注意ヲ加ルトキハ決シテ恐ルニ足ラス又半田
近傍ハ現今ノ景状ニテモ船舶礙繫貨物揚卸
ノ便ニ於テ別ニ缺ク所ノモノナシ故ニ一般運輸
ノ利害上四日市半田兩港ノ優劣ハ姑ク措テ之
ヲ論セス鉄道資材運搬ノ功用ニ至テハ敢テ軒
輕ナキモノト稱スヘシ加之若シ垂井四日市線
ニ由テ資材ヲ運搬スル時ハ大垣岐阜間ノ諸川

及ヒ木曾川ノ如キ巨大ノ橋梁架設ヲ要スルモノ
皆竣功ニ至ラサレハ運搬ノ用ヲ全クスルコト能
ハサルモ名古屋半田線ニ由ル時ハ直チニ木曾
川ノ東側ニ出ルヲ以テ其便否固ヨリ同日ノ論
ニ非ルナリ

今ヤ垂井四日市間及ヒ名古屋半田間線路ノ實
測モ亦其業ヲ竣リ兩線地形ノ峻夷工費ノ
多寡施工ニ要スル時日ノ長短等概テ之ヲ詳
知スルヲ得タルヲ以テ之ヲ左ニ臚列セム
垂井四日市間ハ全線ノ距離三十五哩餘垂井
ヨリ右折シテ牧田川ヲ渡リ養老山下ニ出テ
揖斐川ニ沿ヒ素名ノ西端ヲ經テ四日市ニ達ス
其大半ハ山麓ヲ繞ルヲ以テ數條ノ勾配峻急

ナル河流ヲ横截スルノ工事アリ又屢洪水汎
濫ノ害ヲ受ルノ土地アリ布設ノ工費概計ニ
百万圓ヲ下ラサルヘクシテ起工ヨリ二ヶ年ヲ經
サレハ竣功ヲ告ケサルヘシ而シテ名古屋半田間ハ
全線ノ距離二十哩餘名古屋ノ南端ニ於テ中
仙道幹線ハ左折シテ東北ニ走り此線ハ右折
シテ東海道ヲ横截シ南ニ向テ亀寄半田ヲ經
テ長尾村ニ於テ直チニ港灣ニ接スルモノニシテ
其間數條ノ河流アルモ皆甚ク狭小ニシテ地
形ハ概ネ平坦砥ノ如ク頗ル工ヲ施シ易シ故ニ
其工費ノ概計ハ八拾万圓ニ止ラズシテ起工ヨ
リ竣功マテハ七八ヶ月ヲ出サルヘシ約言スレハ此
線路ハ垂井四日市線ニ比スルハ其距離ハ五分ノ

三工費ハ五分ノ二施工ニ要スル時日ハ僅カニ三
分ノ一ニシテ足レリトス
實測ノ結果前條ノ如キヲ以テ幹線ノ工事ハ
一日モ忽諸ス可ラサルノ今日ニ當リ兩線ノ内宜
シク何レヲ建築スヘキカ智者ヲ待タズシテ之
ヲ知ル可キナリ但幹線資材ハ四日市ニ回漕シ
小汽船ヲ以テ之ヲ熱田ニ轉運スルモ亦一方
便ナリト雖モ重大ナル物品ヲ多量ニ運搬ス
ル時ハ之カ為ノニ特ニ小汽船ヲ備ヘ或ハ兩端
ニ其揚卸ノ便ヲ設ル等ノ費用少レトセス而
カモ風浪潮流ノ變危嶮ト渋滞ノ患ヲ免カレ
難シ故ニ縱令名古屋半田間線路ハ單ニ資
材運搬ノ用ニ供スルモノトシ鉄條其他ノ如キ

ハ幹線竣工ノ後之ヲ他ニ移用スルヲ得ヘキヲ
以テ前陳建築費八拾万圓ノ半額即チ四拾
万圓ヲ以テ全ク此線路ニ消費スルモノト算
スルモ之ヲ中仙道幹線建築費豫算金額ニ
千万圓ニ對スレハ其百分ノ二ニシテ其工事上
ニ與フヘキ便利ノ大ナルニ比スレハ決シテ徒費ニ
非ス然レトモ如此想像ハ所謂杞憂ニシテ名古屋
屋半田間將來運輸營業上ノ景状ヲ推考
スルニ沿線村落櫛比豊富ノ智多郡半嶋ヲ
シテ繁華ナル大都ニ接セシムルモノナレハ必ス收
支相償ハサルカ如キ患ナカルヘシ依テ名古屋
半田間ノ布設ハ速カニ之ヲ令セラレ決行スル
ヲ得策ナリト信ス

若シ夫レ一般運輸上ノ便否得失ニ就テ之ヲ
觀察スルニ四日市ハ西南伊賀伊勢ノ富塚ニ接
シ東北ハ濃尾ト河流相通シ物貨輻湊ノ便ヲ
占ノ實ニ形勝ノ地ナリ然レトモ垂井四日市線ハ
其工事ノ困難ナル工費ノ巨額ナル前條ニ詳
説セシカ如キヲ以テ其計畫ハ猶精密ニ之ヲ
考覈シ非常ノ注意ヲ加ヘテ之ヲ他日ニ決
スルモ未タ晚シトセサルナリ或ハ此線ハ己ニ官
設ヲ令セラレ今却テ名古屋半田線布設ニ着
手スル時ハ體面ニ嫌ナキヤノ論ヲナスモノナキ
ニ非ラス然レトモ是等國家ノ大計ニ関スル
大事業ヲ施スニ當リテハ區々一地方ノ面目ニ
拘泥シテ其規模ヲ誤ルヘキニ非ス況ニヤ目

下只是兩線ノ順序ヲ先後スルニ止ルニ於テ
右ハ中仙道幹線工事實施ノ順序ニ於テ至緊至
要ノ儀ニ付舊ク明察ヲ垂レ名古屋半田間線
路布設ノ儀速カニ裁可ヲ蒙リ度此殿相同候
也

明治十八年三月廿三日

鐵道局長井上勝

工部卿伯爵佐々木高行殿

工部三ノ号

秘

明治十八年三月廿六日

第一号

内閣書記官長

書記官

上申様

内閣書記官

別紙工部省伺中山道鐵道線路西起工ノ義
鐵道局長井上勝ヨリ意見具狀ノ件ハ内務
大蔵兩卿、御下向相成可然歟左様ヲ具シ
仰高裁候也

内務大蔵兩卿、御下問様

別紙工部省伺中山道鐵道線路西起工

ノ義鐵道局長井上勝ヨリ意見具狀ノ件意見

可被申出此旨及照會候也
明治十八年三月廿八日

太甲第50号

中山道鐵道線路西部起工之儀
上申

三月二十八日御下問相成候中山道鐵道線路西部起工之儀ハ工部省ヨリ上申之通適當之考按卜存候條速ニ御裁可相成候様致度此段及上申候也

明治十八年四月八日 大藏卿伯爵松方正義

内務卿伯爵松方正義

太政大臣公爵三條實美殿



要

工甲三。第

明治十八年六月十五

内閣書記官

大臣 内閣書記官長

内閣書記官長

工部省同中山道鐵道線路

西起工部省義鑛道局長井上

勝見具狀之事

石田瀧

參議

伊藤

西郷

井

松

福

大木

藤岡 川村

山田

大木

佐藤

スハ此線ヲ布設シ海運シ此半田港ニ採リ其便ヲ
 得ントスルモノ有シ棄スルニ從ハ工事ノ難由運搬ノ便ニ
 等云云所極シテ運南考按ト移存内務大藏兩卿
 ノ意見ニ於テ無異議ヲ得テ四月廿一日議決ニ
 請款ヲ許シ實セラシムルヲ左記起工ノ期ニ依リ
 左末等今此線ヲ廣クシテ半田線ニ接スルニ從テ
 ト移存ノ依リ四月廿一日議決ニ從テ今此線ヲ
 而シテ建設ノ便宜ニ依リ半田線ヲ架設スルニ好ケ
 左業ノ通旨指揮ニ成下然ハ作ニ可也
 明治十八年六月二十日

西指令業

同ノ趣ヨリ市線ノ我ニ前「指令」通旨ニ得
 右ニ布設ニ致す事
 右ニ布設ニ致す事
 右ニ布設ニ致す事

明治十八年六月二十日

内務大藏陸軍ニ有テ西指令

廢按

秘

工甲三〇號

明治十八年四月十三日

内閣書記官

田中

内閣書記官長

大臣

要

工部省同中山道鐵道線路西
部起工之事
右田議ニ供ス

經費ハ幹線經費ノ内ヨリ
支辨ノ義ト心得旨御指令按

參議

伊藤

西郷

井上

松本

福岡

大木

山縣

川村

山田

大島

佐藤

秘

明治十八年四月十日

第一局

内閣書記官長

書記官

上申棧

別紙工部省同中山道鐵道線路西起工ノ義鐵道局長
 井上勝ヨリ意見具狀ノ件ハ其要旨タル鐵道ノ工事ハ其起工
 ニ先キ資用材料運搬ノ便否如何ヲ講セサルハカラズ然ルニ
 西部ニ係ル岳井四日市間ハ線路ノ困難ナルニ随ヒ工事ニニ
 ノ時日等ヲ要スルハ故ニ此施工ヲ後ニシ而シテ名古屋半田間ハ
 地形平坦ニシテ施工易ク工費モ概計八拾万圓ニ上ラスシテ七八
 ケ月ヲ出ス竣功スハケレハ此線ヲ布設シ海運ヲ此半田港ニ

採り其便ヲ得ントスルモノニ有之案スルニ彼此工事ノ難易運搬ノ便否等其云々所極メテ適當ノ考案ト被存内務大蔵兩卿ノ上答ニ於ルニ無異議ニ付伺ノ通御先許ノ上該工費概莫金八拾萬圓ハ曩ニ御裁令相成候上由直江津間ノ工費全採先以幹線經費中ヨリ支辨タシテ積リ左様ノ通御指令相成可敷仰高裁候也

御指令按

伺ノ趣聞届候条該經費ハ先以幹線經費

ノ内ヨリ支辨候義ト可心得事

但費額内訳及需用期限等早々取調申出ハシ

明治十八年四月二十一日

會計検査院并内務大蔵陸軍ノ三有ノ通牒

系照

四日市線鐵道布設ノ裁ニ付伺

伺ノ趣官設起工ノ取調而後係其經費ハ中山道線運送費ノ中ヨリ支辨タシテ積リ左様ノ通御指

著手スヘシ

明治十七年五月八日